

いま、なぜ、三条西家本なのか

——付紅梅文庫旧蔵本源氏物語「空蟬」影印——

上野 英子

一、はじめに

令和元年秋、新たな青表紙原本が見つかったというニュースが、日本国内を駆け巡った。青表紙本とは藤原定家が書写・校訂した源氏物語の写本のこと、池田亀鑑氏によって認定された原本四帖が現存している。すなわち、前田育徳会尊経閣文庫蔵『花散里』『柏木』・文化庁保管『行幸』・安藤積産合資会社蔵『早蕨』がそう、今回、これら四帖のツレとみられる『若紫』が発見されたというのである。

当該本については中古文学会秋季大会(二〇一九年一〇月一三日、於関西学院大学)において、藤本孝一氏が報告された。発表資料によれば、新出『若紫』がツレであることの検証として、(一)定家の奥入が記されていること (二)本文料紙が平安・鎌倉時代の「溜め漉き」で作成されたものであること (三)表紙は『花散里』『柏木』と一致し、題簽は『花散里』『柏木』『行幸』と筆跡・料紙が同一であること (四)本文の筆跡も他の四帖と同筆と認められること など

を挙げられていた。

そして来る二〇二〇年二月二十九日には、朝日新聞社の主催で定家本の歴史的意義を探るシンポジウム「人がつなぐ『源氏物語』——新発見「若紫」をめぐる——」が開催される予定である。

こうした一連の動静をみると、源氏物語における定家本、そのなかでも青表紙本と呼ばれてきた定家本に対する世間の注目度は依然として揺るぎないことを痛感する。無論、歴史的事実としても、青表紙本なるものは古来から源氏物語の重要な伝本の一つとされてきたわけだが、現在に至っては重要な伝本の一つどころか、活字本の大半が青表紙本（なかでも現存する最善の青表紙本と評価された大島本）を底本として採用するなど、独壇場と化している感がある。これまで稿者は、こうした状況だからこそ、〈定家本なるもの〉を根底から考えてみる必要がある、そのための一材料として、紅梅文庫旧蔵本や日大本といった三条西家本も有効であると主張してきた⁽¹⁾。本稿では三条西家の書写態度という観点からその有効性を論じてみたいのだが、まずは前提となる事柄を、稿者がこれまでの報告書で論じてきたことのなかから簡条書きでまとめておこうと思う。

(一) 現存する定家本には〈四半本〉と〈六半本〉の二種類があること。ということとは、そもそも定家が自身の手沢本あるいは家の証本として、書写あるいは校訂・注記を加えていった揃本の源氏物語には、少なくともこの二種類があったということである。

(二) この二つの定家本のうち、池田亀鑑氏は〈四半本〉を青表紙本と認定したが、どちらの本文の方がより遅かったのか、換言するならば定家の最終本文がどちらだったのか、という問題については、研究者によって見解がわかれていること。

(三) 〈四半本〉〈六半本〉ともに、書写ないし加筆という形で定家の筆跡が確認できること。

(四) (三)より、後代この両本はそれぞれが青表紙原本として捉えられ、そのことが青表紙諸本間における本文対立の一因となったのではないかということ。

(五) 青表紙本には本来巻末に奥入が付いていたが、阿仏尼がこれを切り取って二条家に戻したというのは、三条西実枝の講釈である(『岷江入楚』)。よって三条西家の人々は、巻末の奥入が切り取られた〈六半本〉の方を青表紙本と認識していた可能性が強いこと。

(六) 大島本は〈四半本〉の最善本とされているが、〈六半本〉と最も親しいのは大島本では無く、紅梅文庫旧蔵本であったこと。

(七) 紅梅文庫旧蔵本は三条西実隆が最初の手沢本として、文明年間に手づから全冊書写し長期にわたって愛用してきたところの写本(成立年代から〈文明本〉と仮称するが、原本は散逸した)、その転写本の系列であること。しかもそこには連歌師飯尾宗祇が持参した「青表紙正本帚木」との異同も記されていたろうこと。

つまり実隆が最初に書写した青表紙本なるものは、定家本としてはなかなか筋のよいもので、〈六半本〉に近いものだった可能性が強い、という見通しである。いま、定家本のなかの〈四半本〉については、前述した青表紙原本に明融臨模本、そして大島本が現存し、資料には比較的恵まれているといえるだろう。だが〈六半本〉の方は、原本といえは『定家自筆本奥入』にみられる残存本文だけであるため、もうひとつの定家本の姿を知るために三条西家本、就中紅梅文庫旧蔵本は有効なのではないかという見通しである。

とはいえ、いかに実隆が筋の良い底本を得ていたとしても、それを恣意的に書写したり、自身の解釈で勝手に校訂

し直した本文を作っていたとすれば、三条西家本は定家本なるものを考えるための材料にはなりえない。ただ室町時代に行われた源氏物語写本のひとつと位置付けるのみである。実際これまでは、彼らの本文中に河内本など他系統の本文が混入されていることから、同家による恣意的な校訂結果かと疑われてきた。だが果たして彼らは恣意的に本文を改めていたのだろうか。

二、青表紙本支持の理由

三条西家以前の本文状況はといえば、今川了俊が「青表紙と申正本、今は世に絶たるか」（『師説自見抄』）と歎き、四辻善成や一条兼良といった碩学たちでさえ、「雖証本皆有異同、猶勘合古本、且可加料簡者耶」（『河海抄』）「源氏の本一様ならず、人の好む所に従ふべし」（『花鳥余情』）と手をこまねいたほど、混乱した状況だったといえるだろう。そうしたなかにあつて三条西家の人々は「当流の本」として青表紙本を選び、一度は「絶たるか」とまでいわれていた青表紙本を再び源氏物語の本文史上に位置づけたわけである。

では彼らはどうやって今そこにある写本を定家本だと判定したのか。三条西家はかつて後花園院より秘蔵の定家自筆『伊勢物語（天福本）』を賜っていた（学習院大学蔵天福本伊勢物語表紙打書）。また『明月記』によれば、宗祇より「定家卿筆色紙形」を贈られたり（延徳二年三月二七日条）、定家筆『三代集聞書』を書写していた（同年月二九日条）こともある。定家の真筆に馴染んでいたために、まずは筆跡で見当をつけていたように思われる。

では彼らはどうして、定家の本文を良しと判断したのだろうか。公条がまとめた『明星抄』「総論」に、その理由が述

べられていよう思う。

【引用一】

諸本の不同勿論歟。其故は凡一切の文章に草書中書清書の三あり。又展転書写の誤り勝計すべからず。況大部の物語、書生の失錯勿論の義也（青表紙河内方には限るべからず）。又此物語の習、史記の筆法をなずらへて同詞を以て書也。然を道知らざる後生の所為に、書生の誤なるべしと称して今案を加へなをし改め来れり。さる故に正本まれにのみなりて物語の本意を失へり。爰に定家卿の青表紙、正本にして作者の本意を得たり。尤可守此旨者也。

是は内典にもある事なり。天台の本書に書生の誤り多て無尽の論義ありしを、其後廬山の竹中本と云正本出来して校合せしに、年来すぢともなき書あやまりを無尽の理をつけて、申来れる論義おほかりしかば、則其論義悉破れて、数すくなくなれり。それよりして天台六十巻の本書正説を得たりと申伝たり。

此如く、此物語も展転書写の誤りをそだて、無尽の理をつけたる事ども、諸抄に有之。されば定家卿も古今の奥書に、書生の失錯を以て有職の秘事と称す、道の魔障といふべしといへり。又後人の推量を以て直し改もて来れる事どもあり。尤可悲事なり。此青表紙は誠に正義にして竹中本とも申べきなり。(2)

右は原文を私に改行して三段に分けたものである。段毎に解析してみる。

第一段では、源氏物語に今日見られるような本文異同が生じた原因は三つあって、ひとつは物語が誕生した時点から草書・中書・清書と三通りの本文が世に出ていったため。ひとつは、展転書写の間に自然発生的に誤写が生じたため。そしてひとつは、「道」（書写時の心得とも、源氏物語の奥義とも）を知らない後代の人間が「書写者の写し誤りだろう」

と独り合点して物語本文を直してきたためであり、かくして正本は稀になり、物語の本意は伝わらなくなってしまうと嘆いている。

そしてその上で、波線部「爰に定家卿の青表紙、正本にして作者の本意を得たり。尤可守此旨者也」、すなわち定家の青表紙本こそ作者の本意を伝える「正本」なのであって、その理由は、定家が尤も「此旨」を守っているからというのである。ここでいう「此旨」とは、勝手な解釈で妄りに本文を改めない、という意味かと思われた。なぜなら、本文異同を招いた三つの理由のうち、最初の二つは最早どうすることも出来ないが、三つめの理由だけは、書写者個々人の意識次第で変わりうるものだからである。

つづく第二段では、本文の乱れが注釈書に更なる混乱を引き起こしてきたことを述べている。公条自身、『細流抄』『明星抄』と長年にわたって注釈書作りを手がけてきただけに、こうした弊害を熟知していたのだろう。仏教界においても同様の事象が見られたこと、しかし「廬山の竹中本」の出現により本文異同から生じた無尽の論議が消えて、天台六〇巻の正説が得られたと説いている。文末に「申伝たり」とあることから、この知見は仏教書誌学からのものと思われる。

そして第三段、源氏物語の注釈世界でも「展転書写の誤りをそだて、無尽の理をつけたる事ども」が多いと批判し、こうした行為に対しては定家卿も「道の魔障」だと批判しているというのである。点線部の定家の言葉は、「定家筆古今和歌集(貞応本・嘉禄本)奥書にみえる「近代僻案之好士、以書生之失錯、称有職之秘事、可謂道之魔障、不可用之」を指すとみてよいだろう。公条は、誤写が招いた本文異同をもとに、とんでもない秘説を生み出していった愚かさを指摘すると同時に、再び書写の問題に戻って、傍線部「後人の推量を以て直し改もて来れる事どもあり。尤可悲事なり」つまり、後代の人が、自身の推量で物語本文を勝手に直してきたのは尤も悲しむべきことであるとし、この二点を厳

しく戒めているようである。

この第三段に関連して更にいうならば、例えば『貞応本古今集』の奥書には次のようにある。

【引用二】

(a) 此集家々所称、雖説々多、且任師説、又加了見、為備後学之証本、不顧老眼之不堪、手自書之。

近代僻案之好士、以書生之失錯、称有職之秘事、可謂道之魔性、不可用之、但加此用捨、只可隨其身之所好、不可存自他之差別、志同者可隨之

貞応二年(一二三三)七月廿二日(癸亥)

戸部尚書藤(判)

同廿八日、令説合訖、書人落字了

伝于嫡孫、可為将来之証本

(b) 以家本不違和漢文字仕併行分等、連々書写校合畢、但於

仮名序初五枚者、先人御自筆也、彼強行分等、不被守正本

之間、雖隨其、自春上不違一字、至行分以下落字等、皆

以如本書之、正本細々披見之条、不可然之間、如此慙懃染

筆了、曾不相違家本者也

文保二年(一二三二)四月十三日 羽林中郎將藤(判)

私に振った(a)(b)のうち、前者が貞応二年(一二三三)の定家の奥書である。波線部分が『明星抄』と重なり、内

容はもっぱら注について述べたものである。思うに、近代僻案の好士らが陥ってしまった陥穽とは、誤写だったかも知れない本文の一言一句に至るまで、何とか完全に理解しようとする無理をしすぎたためではなかったか。理屈をこねまわした挙げ句、とんでもない秘説まで産み出してしまったわけである。そうした秘説を「道の魔障」と否定した定家は、本文に対しては、解らない箇所は解らないまま、書写していたように思われる。そして定家は読み合わせを行い、脱字等を補って、「嫡孫に伝へて、将来の証本とすべし」と結んだわけである。

(b)は文保二年(一三二八)の藤原為定(定家の五世孫)による書写奥書である。仮名序以外は家本(定家本)を漢字仮名表記法・仮名遣い・行取りまでも一字違わずに書写したとある(3)。

すると公条はこうした奥書を読んで、定家の考え方を理解、共鳴し、底本に書写していると判断したのでろう。更に家本を一字違わず書写してきたという子孫たちのありようにも感動し、青表紙本への信頼が培われたものと思われるのである。

また三条西家が伝えた古今伝受に、次のような文言がある。東常縁から飯尾宗祇へ伝えられた古今伝受は、宗祇から実隆へと伝わり、三条西家内部でも大切に守られていった。次に紹介するのは、明応九年(一五〇〇)仍覚(公条)判のある『古今集切紙口伝』のなかの一項目である。

【引用三】

一 あをんの事

貞応の本にあをんと書たり、あそんとよむへし
定家卿の書あやまりなり、喜撰法師をも撰喜と

か、れたるたくひ也、これも貞応の本にあり、ま
きれなき事なれば、むかしは物を細かにせされは
そのま、をかれけるより、後人うつして秘事に
なれり、勝臣是をかちをんといへは、臣の字ををん
ともよめとも、只宗于あそんと読へし⁽⁴⁾

定家筆貞応本古今和歌集に、源宗于の敬称について、本来ならば「朝臣」とか「あそん」と表記すべきところを「あをん」とした箇所があること。これは定家の誤写であること。そうした類いは他にもあるが、「むかしは物を細かにせされは」訂正することも無く、そのままにしていたのだからこと。それを後人があれこれ理屈をこねまわして秘説化していったようだが、ここは「あをん」とあっても「宗于あそん」の意味だと解釈しておけば良いとされているのである。そして実際、逍遙院(実隆)書写・同奥書の宮内庁書陵部蔵貞応本古今和歌集には、

むねゆきのあをむ

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はをかなん(卷一五・恋歌五)

とあり、実隆も「あをむ」を継承していたことがわかる。つまり三条西家では貞応本古今集のこのくだり、本文は「あをむ」として訂正すること無く底本通りに書写し、ただし解釈するときにはこれを「朝臣」と解釈していたことが窺われるのである。明らかな誤写と解つていても、それでも実隆は本文を変更しなかったわけである。無論、「あをん」に

ついで珍説を展開することも無かった。では、これと同様の書写方法が、源氏物語においてもなされたのだろうか。それともこうした書写方法は歌書にだけ適用されたのだろうか。

三、三条西家の書写態度

三条西家本の底本が散逸している現在、すべては推測にすぎないのだが、ここで二つの事例を紹介していこう。まず、青表紙本の本文を紹介した先行注を継承しておきながら、家本（日大本）がそれとは異なる本文であつても、青表紙本に合わせて家本を訂正しなかつた例である。明石巻の「月いれたるま木の戸くちけしきはかりをしあけたり」（『源氏物語大成』四六四頁八行目）について、『明星抄』では次のように注釈している。

【引用四】

月いれたる櫛の戸口ばかり

此詞殊勝と定家も感給けると云々 花鳥にみえたり 河内本「けしきことに」と云々

凡ソ今夜、源をさして待がほならんも、さし過てにくきけあるべし 又あまりにとぢこもりても、あしかるべきを、「けしきばかり」といへるわたり、尤艶なる也 朱此所にて此時源氏を待むかへ奉らんに、さし過たらんも又心づかひなからんも、如何にぞあるべきを、「気色ばかり」と云て尤艶なるにや 能々可思く

これは明石入道の懇請をうけた源氏が、八月十三日の月がはなやかにさし出た夜に、明石の君の住む岡辺の屋敷を

初めて訪れたくだけりである。『明星抄』では、源氏を迎える屋敷の戸口が「けしきことに」（様子も格別に）開いていたとするのは河内本だとする。「けしきばかり」（ほんの形だけ）開いていた、とする本文については「定家も感給ける」とやや曖昧な表現をとっているが、公条としては青表紙本の本文は「けしきはかり」だったと認識していたものと思われる。

なぜなら、「花鳥にみえたり」とあるその『花鳥余情』では、「定家卿の青表紙にはけしきはかりをしあげたりとあり」「この月入たるまきの戸口は源氏第一の詞と定家卿は申侍るとかや」として、「けしきはかり」という本文が、定家本の本文であったことを繰り返し強調しているからである。なお『花鳥』では、河内本の本文を見出し語としながらも、「けしきことに」「けしきはかり」、「両説ともに其謂なきにあらず 人の所好にしたかふへし」と結論づけていたが、三条西家の人々は定家の本文の方をよしとしたわけである。

よって彼らは青表紙本の本文が「けしきはかり」だったことは充分に認識していたことになる。ところが家本（日本本）ではこのくだけり「けしきこと」となっており、しかもそれを訂正した形跡が無い。これは先の古今伝受の例で見てきたような、本文と解釈とを分けて扱うという考え方、換言するならば解釈の如何に関わらず、物語本文は底本通りに残しておく、という方針を示唆した事例かと思われる。

もう一例紹介しよう。三条西家の注釈書（本例の場合は『細流抄』『公条自筆細流抄』『明星抄』の三書。猶『弄花抄』では立項せず。『山下水』ではこの注を含む濔標巻が散逸）のなかで、公条が一貫して注釈項目の見出しに用いてきた本文がある。三条西家の注釈書では、同一項目であっても注釈書によって見出しの本文が変わることがある⁵⁾。よって各注釈書のなかで一貫して用いられたということは、公条が見出しとなったその本文を支持していたためと考えら

れるのである。ところが家本(日大本)の本文はそれとは異なっており、にもかかわらず家本の本文に訂正痕もみられなかつた事例である。問題にしたいのは薄雲巻。

ひはをわりなくせめたまへは、すこしかきあはせたる、いかてかうのみひきくしけむとおほさる。わか君の御ことなど、こまやかにかたり給つ、おはす。(6)

「わか君」(若い姫君)を手放し寂寥となつた大堰の屋敷に源氏が訪れた。源氏の所望で明石の君がつま弾いた琵琶の音色がすばらしく、感嘆した源氏は、どうしてこのように「ひきくしけむ」と思い、今は紫上の許で養育されている姫君の様子を詳しく語りきかせたというくだりである。傍線部、『源氏物語大成』によれば、青表紙本を含む諸伝本は「ひきくしけむ」でほぼ統一されており、例外は「ひきすくしけん」とした日大本と、「ひきけむ」とした保坂本(別本)のみである。このくだり、公条はどのように解釈していたかといえ、次のようになる。猶、私に「印・句読点、清濁を補つた。

【引用五】

『細流抄』ひきくしけむ(六・二二⑫)……河海「薰」云々。花鳥「具」と云々。いづれもおもしろきか。

『公条自筆細流抄』ひきくしけん……河海「薰」云々。花(鳥)説「具」也。いづれもおもしろき歟。青表紙に「ひきすくし」トアリ。

然バ「過」也、超「過」心歟。

『明星抄』ひきくしけん……河海「薰」云々。花鳥「具」也。何も面白き歟。

ここで引用された先行注は『河海抄』と『花鳥余情』だが、両者はそれぞれ見出しが異なっている。

・『河海抄』ひきくんじけんとおほさる…薫歟〔薫修の心なり〕

・『花鳥余情』かくしもひきぐしけんとおほす…一本「ひきくんじけんとおほす」とあり。「ぐし」は具也。

物のと、のほりたる心なり。『河海』には薫の字に釈す。不審なり。

「ひきくんじけん」を推す『河海抄』では、「くんず」は「薫修」（仏教用語。香気が衣服に移りしみこんで、ついにはその衣服自身が香気を出すに至るように、体や言葉、心のはたらきが心に残す影響作用）の意味とする。明石の君の心意が琵琶の技倆と相まって薫り出たことを称えた、と解釈したものとと思われる。一方「ひきぐしけん」を推す『花鳥余情』では、「ぐす」を「具備する」と捉えた。琵琶の音色を聞きながら、「どうやってこれほどの技倆を身につけたのだろう」と感嘆した、と解釈し、『河海抄』の説に異議を唱えたようである。

これらを用いて、公条は三著（『細流抄』『公条自筆細流抄』『明星抄』）いずれにおいても、見出しの本文は「ひきくしけん」で統一している。しかも『公条自筆細流抄』、同書は龍谷大学図書館が所蔵する公条の草稿本で、『細流抄』から『明星抄』への展開が解る資料であるが、そこには公条自身による細字書き入れで「青表紙に「ひきすくし」トアリ。然バ「過」也、超「過」ノ心歟」（「」は墨消し）と記されている。

この書き入れいところの「青表紙」とは、現行の日大本のことを指すようである。なんととなれば同書には同様の細字書き入れで「今本」「青表紙」と称してその本文を紹介しているのだが⁽⁷⁾、どの紹介文も現行の日大本と一致するからである。加えて、こうした細字書き入れ注のなかには、末尾に「天文三 九月注也」との注記が付いたものまである（朝顔巻「きのふけふと」項）。天文三年（一五三四）といえば、当時実隆は既に八〇歳、この三年後に薨じている。ま

た『明星抄』の成立は天文八〜一〇年頃とされているから、『明星抄』完成以前の既にこの頃に、実隆最後の手沢本であるところの日大本は、公条に譲られていたものと思われる。『公条自筆細流抄』の公条による細字書き入れのなかに、日大本のことを「今本」となせり。同心歎などあるのは、「今読んでいる本では」の意味であり、公条は父に譲られた日大本を参照しながら、本文異同やそれに基づく解釈の違いなどを書き入れていったものと思われる。

とするならば、公条は、父に譲られた実隆最後の手沢本（それは公条にとつては、家本となつたものだろうが）の本文が「ひきすぐしけん」であることを了解していた。そしてこの本文だと「引き過ぐ」（時が過ぎる）という意味だから、源氏は「どうしてこんな風に（殆ど訪ねることも無く、これまで）過ぐしてきたのだろう」と後悔したようになるのである。だがその後の『明星抄』によれば、「ひきすぐす」の本文も、また「過ぐ」という解釈も採用されず、見出しも注釈内容も『細流抄』の時と同じだったことになる。公条の解釈としては、やはり「ひきくしけん」を本文とし、意味は「薰」「具」いずれも良し、としたのだろう。なお現行の日大本だが、当該箇所本文は次のようになっている。

ひきすぐしけん^{イ無}

「ひきすぐしけん」の右に、「イ無」と小書きされているのである。この異文注記が実隆、公条、どちらによるものかは不明である。ともあれ、本行は訂正しなかったものの、異文注記の形では書き留めておいたということのようである。

以上、三条西家において底本の本文は忠実に書写されていたであろうことを述べた。おそらくそれは実隆から始まり（8）、公条・実枝にも引き継がれていったのだろう。だとするならば、三条西家本にみられる河内本との混成は、

一体どのように解釈できるだろうか。二通りの可能性が考えられるかもしれない。一つは彼らを選んだ底本自体が、既にそうした混成本文だったという理由。そしてもう一つは、河内本系本文の混入している姿こそ、〈六半本〉本来の本文だったのではないかという可能性である。

なお今回、淑徳大学教授齋藤鉄也先生のご厚意により、計量文献学からみた紅梅文庫旧蔵本の分析を試みた御論文二本をお寄せいただいた。また大阪大学名誉教授の伊井春樹先生には、拙著に関する書評をお寄せいただいた。共に身に余る光栄として、篤く御礼申し上げます。

注

- (1) 拙稿「調査報告一〇五 ふたつの定家本源氏物語と三条西家本」付、実隆文明本の転写本としての紅梅文庫旧蔵本紹介——(平成二九年三月、文芸資料研究所『年報』三六号)・同「調査報告一二一 紅梅文庫旧蔵本源氏物語について——いま、なぜ、紅梅文庫本なのか——(付、桐壺 帚木影印)——(平成三二年三月、文芸資料研究所『年報』三八号)など。なおこれらは拙著『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相』(二〇一九年、武蔵野書院)にまとめておいた。本稿もこの著書と重なるところが多い。
- (2) 引用は実践女子大学黒川文庫蔵『明星抄』(無刊記本)によった。ただし私に改行・清濁・句読点・会話印・傍線などを施している。また傍訓は省いた。
- (3) 引用は今治市河野美術館蔵『話訓和歌集』による。
- (4) 引用は実践女子大学山岸文庫蔵本(写本)による。
- (5) 因みに、『弄花抄』『細流抄』『明星抄』の三書に共通して立項された注の項目数は六十八例あるが、そのうち見出しの本文が三書間で一致しているのは十四例、いずれかに異同が見られたのは五十四例であった。また後者の内訳は、以下のようになる。

・弄花抄・細流抄・明星抄それぞれ異なる場合：十三例

・弄花抄のみ異なつて、細流抄と明星抄が一致している場合：三十五例

・細流抄のみ異なつて、弄花抄と明星抄が一致している場合：五例

・明星抄のみ異なつて、弄花抄と細流抄が一致している場合：一例

『弄花抄』と『細流抄』『明星抄』の間は大きく離れているが、類似しているとみられる後二書の間でも、見出し本文の異同は認められる。

(6) 引用は『源氏物語大成 校異篇』六一二頁^⑫行目。但し私に句読点等を施した。

(7) 例えば濫標卷。「(・)気ちかき物から」ひぢゝかに」項に「今本ひそびかとあり：」、「さばかりの心がまへもかたく侍を」の項に「今本かたくをまねびとなせり：」等とある。

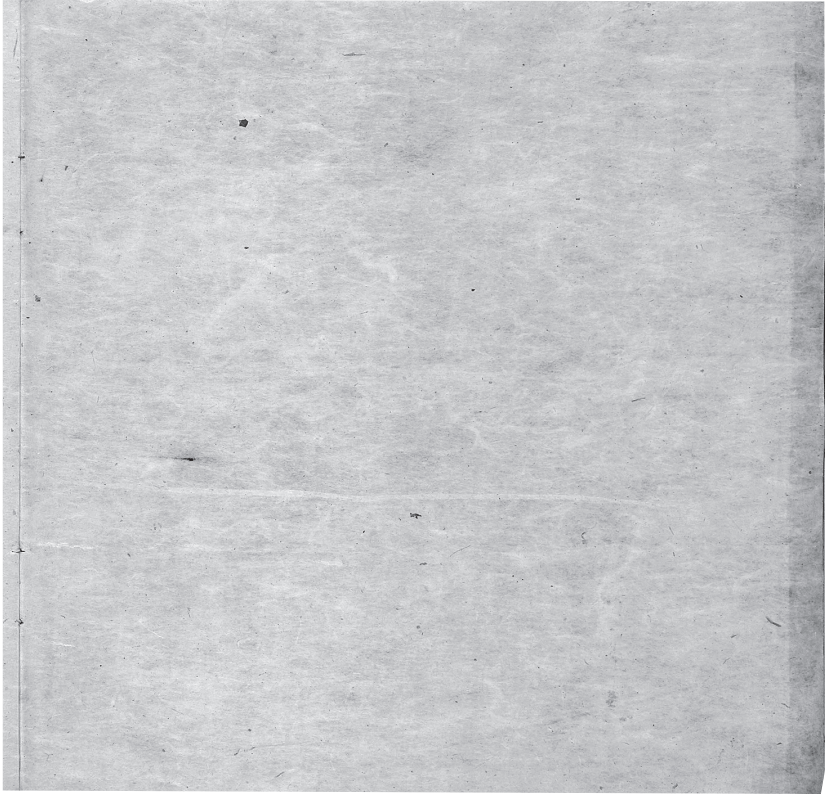
(8) 応仁の乱で焼失した古典籍を補うべく、朝廷では大がかりで、かつ精緻な古典籍復旧運動がなされていた。井上宗雄氏によれば「若年の実隆が、後年貴族社会における最高の文化人・古典学者として君臨しえた素地はこの時期から形成されていった」と指摘する(一九八四年改訂新版、風間書房『中世歌壇史の研究 室町前期』二二二頁)。

謝辞

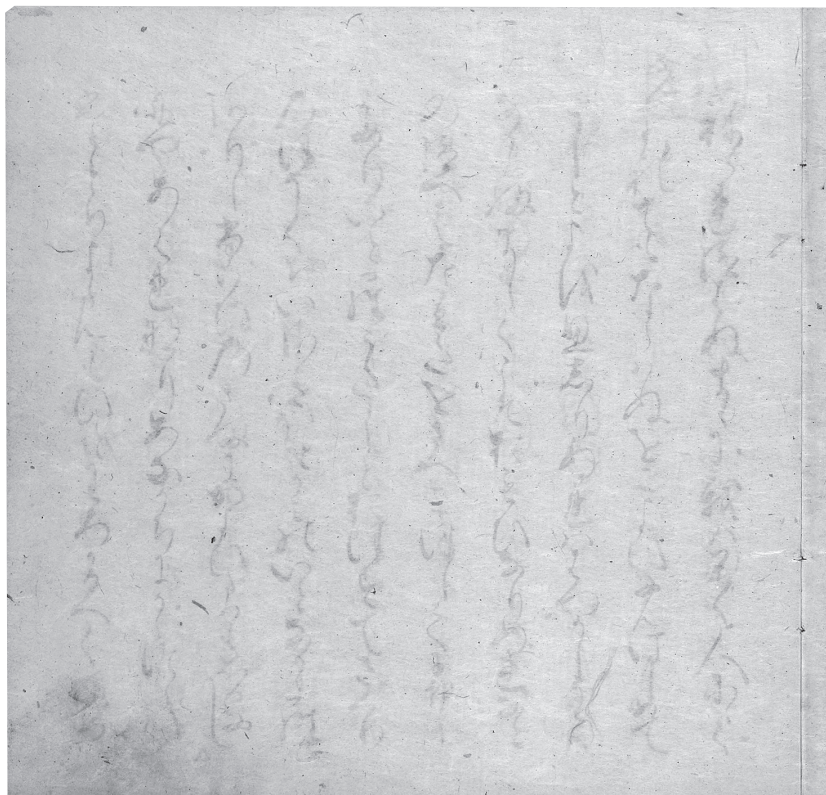
本研究はJSPS科研費 JP19KI3063 の助成を受けたものです。



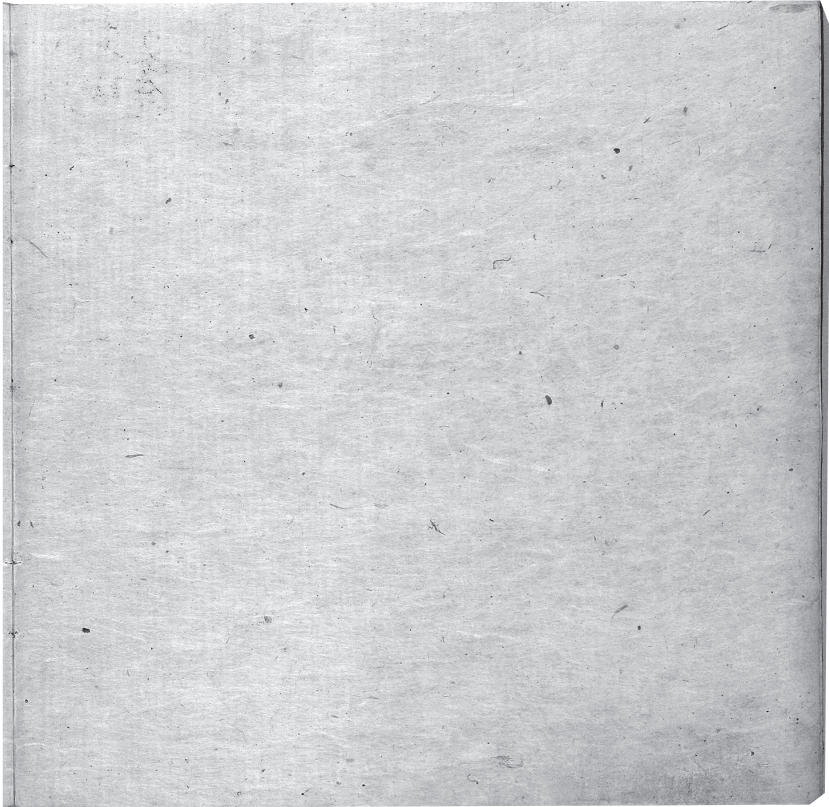
紅梅文庫旧蔵本「うつせみ」表紙



見返し



前遊紙オ



前遊紙ウ

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 12 vertical columns. The script is dense and fluid, with varying line thicknesses and some decorative flourishes. The text is written on a light-colored, slightly textured paper.

ありては、おつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ
おつふおつふおつふおつふおつふおつふ

あつちやいぬけのふとあつち
そちよふふふふふふふふふ
じやいぬけいぬけいぬけいぬけ
いぬけいぬけいぬけいぬけ
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつち

いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか
いづれか

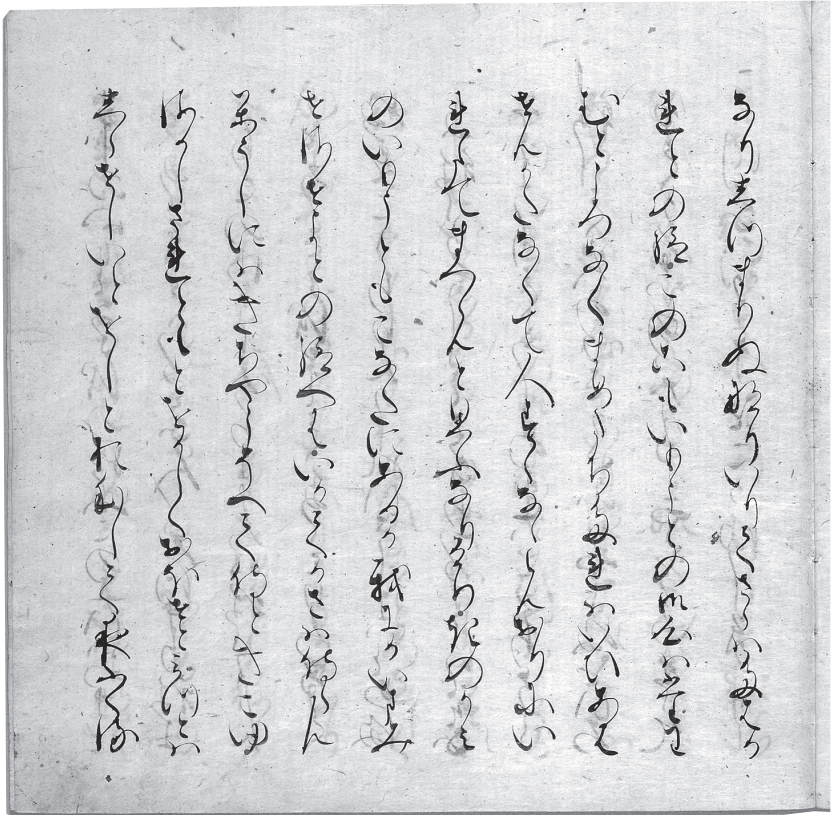
此の世にありたりて此の世にありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて
ありたりてありたりてありたりてありたりて

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, consisting of ten vertical columns of characters. The text is written on a light-colored paper with some staining and is oriented vertically on the page.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, arranged in approximately 10 vertical columns. The script is dense and fluid, characteristic of historical Islamic calligraphy. The text is written on a light-colored, slightly textured paper.

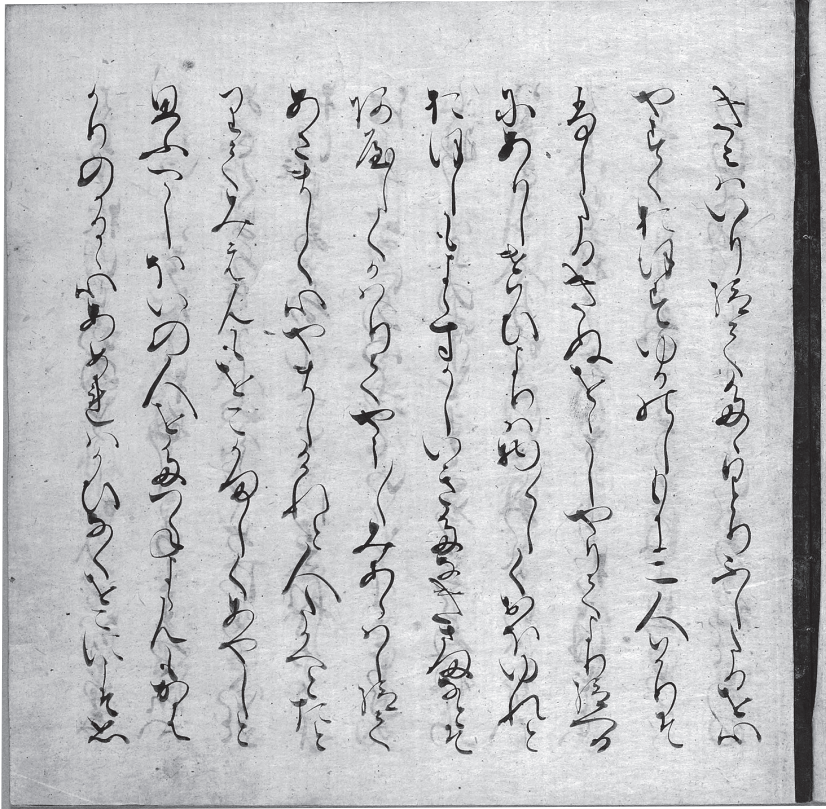
Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, consisting of ten vertical columns of characters. The text is written on a light-colored paper with a faint grid. The characters are dark and fluid, typical of the cursive style. The text is arranged in ten vertical columns, reading from right to left. The characters are highly stylized and connected, characteristic of the cursive style.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive writing. The text is oriented vertically on the page.



Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, arranged in approximately 12 vertical columns. The script is dense and fluid, characteristic of historical manuscripts. The text is written on a light-colored, slightly aged paper.

ふきつゝ一葉も又うらりくたつたふらふら
にまゝにけりてはけりしうらりくたつたふらふら
福もあらまゝに人あつて公の御くたつた
ふらふらにけりしうらりくたつたふらふら
あつたふらふらにけりしうらりくたつたふらふら
ふらふらにけりしうらりくたつたふらふら
ふらふらにけりしうらりくたつたふらふら
ふらふらにけりしうらりくたつたふらふら
ふらふらにけりしうらりくたつたふらふら



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive script. The text is oriented vertically on the page.

Handwritten Japanese text in cursive style, oriented vertically. The text is written in black ink on a light-colored paper background. The page is numbered '10' at the bottom center.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The script is dense and fluid, with varying line thicknesses and frequent loops. The text is written on a light-colored, slightly textured paper.

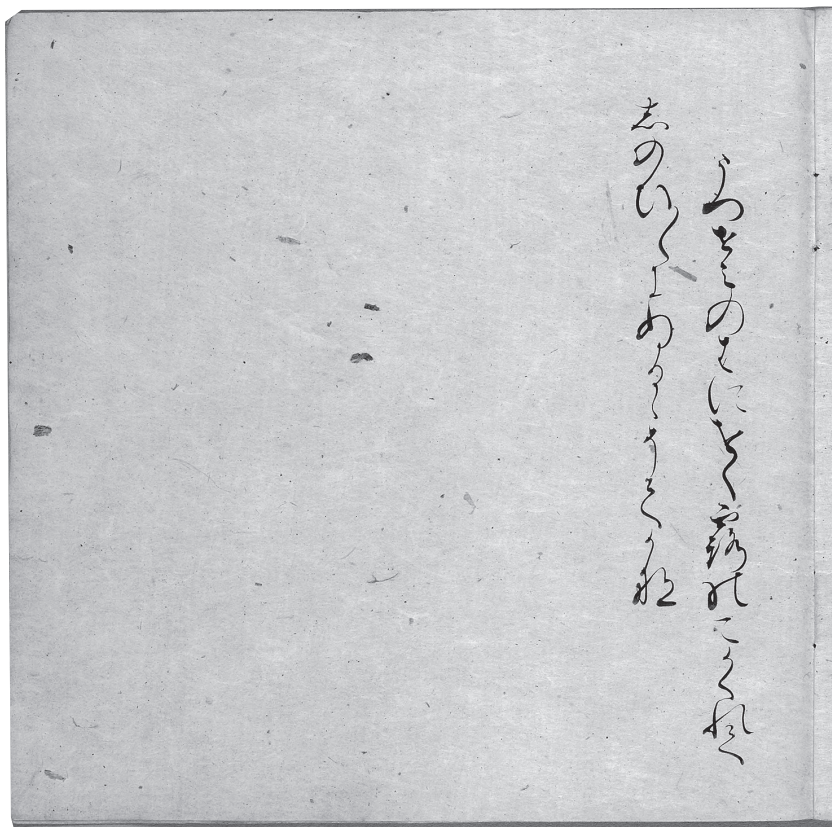
Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, consisting of ten vertical columns of characters. The text is written on a light-colored, textured paper. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive style. The columns are arranged from right to left, with the rightmost column starting with a large character that looks like 'あ' (a) and the leftmost column ending with a character that looks like 'る' (ru).

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 10 vertical columns of characters.

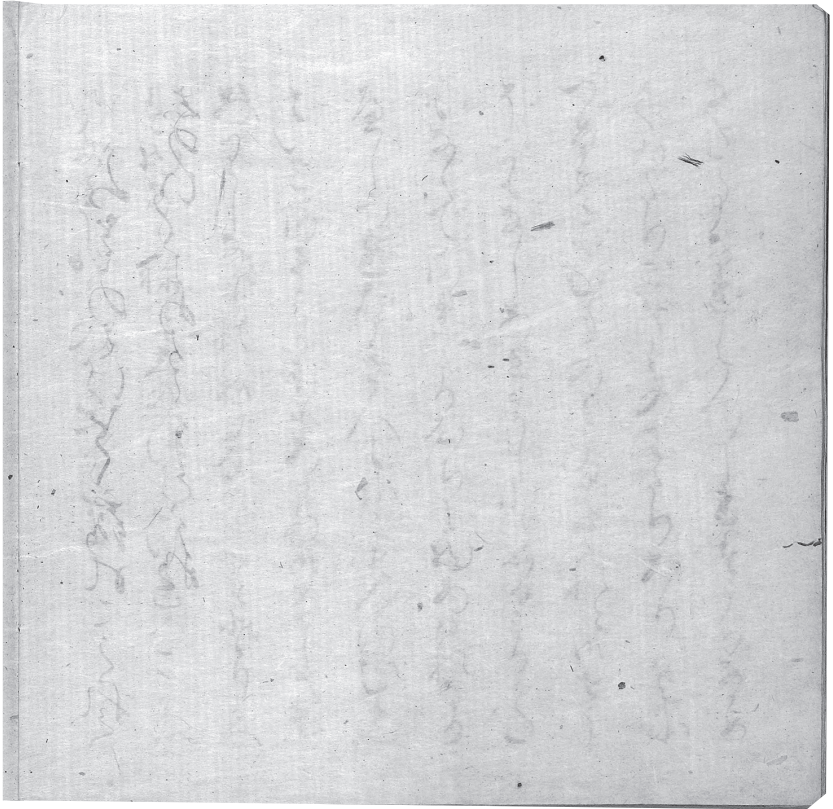
Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, consisting of ten vertical columns of characters. The text is written on a light-colored paper with some staining and is oriented vertically on the page.

らるるの身とくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

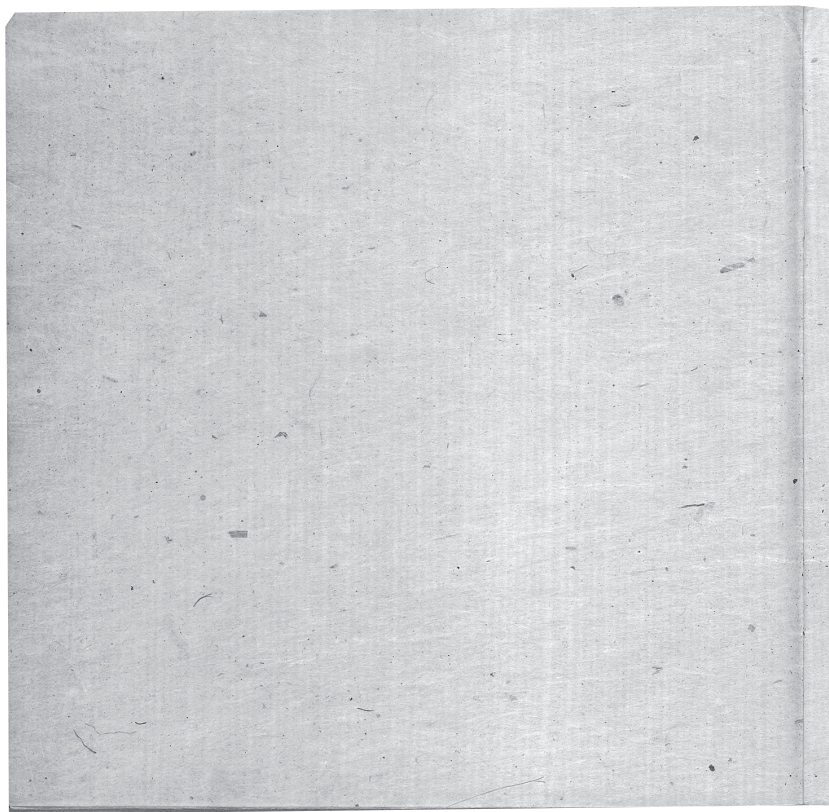
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in approximately 10 vertical columns. The text is dense and difficult to decipher due to the cursive style.



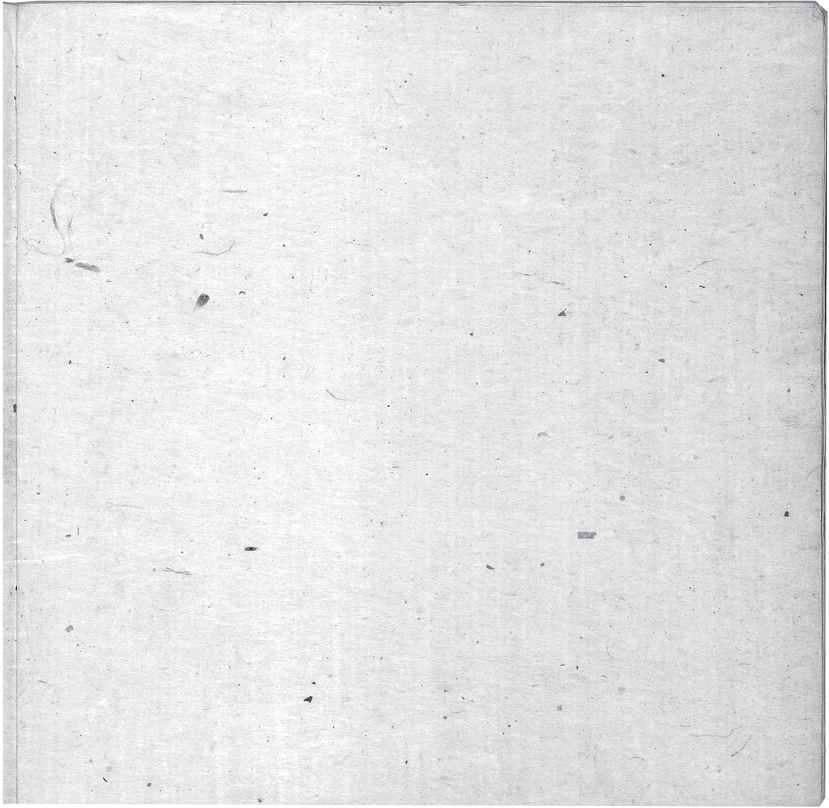
15 オ



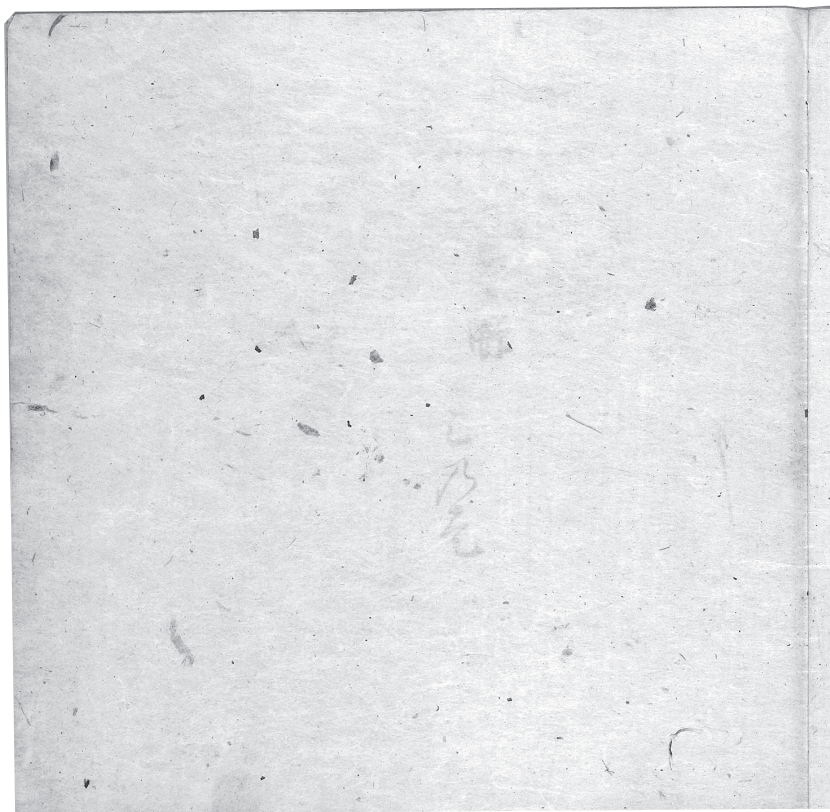
15ウ



後遊紙 1才



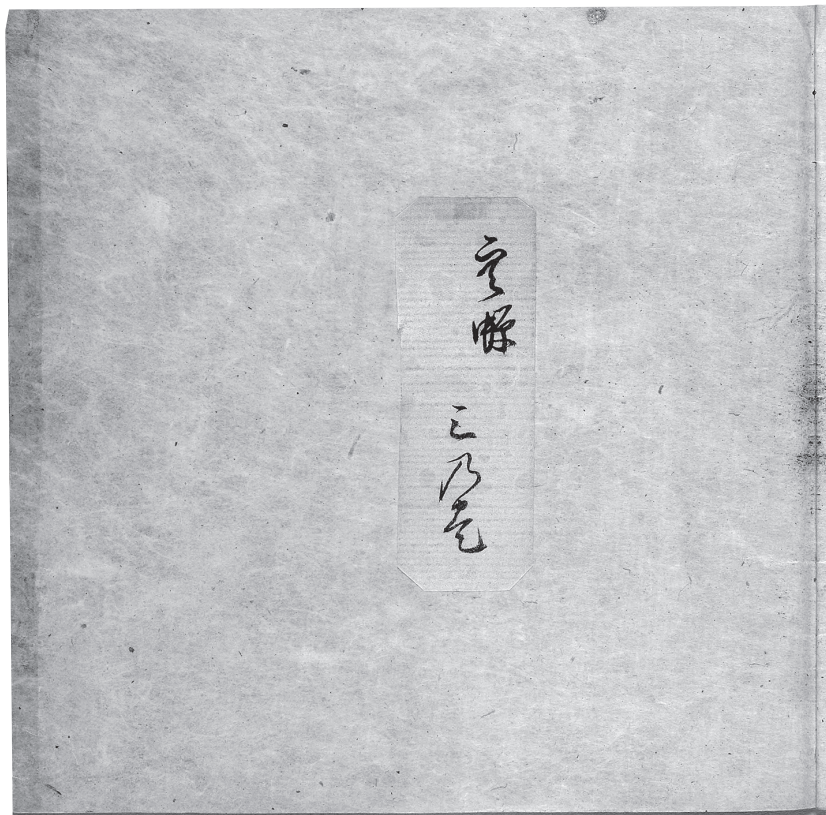
後遊紙 1ウ



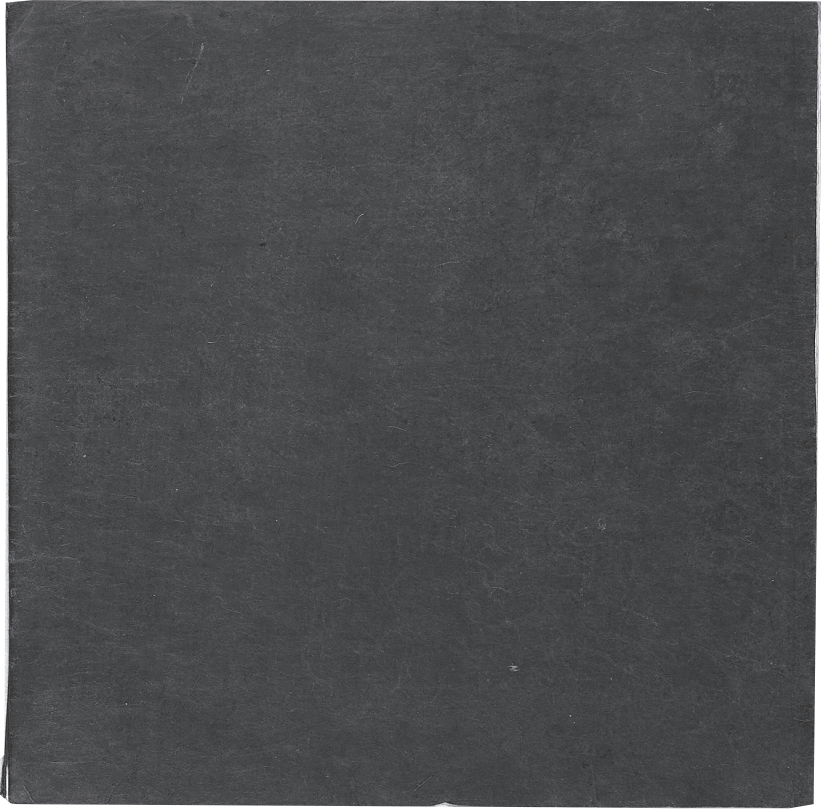
後遊紙 2オ



後遊紙 2ウ



後見返（付箋貼付）



裏表紙